

第 1 回 (H28. 3. 22) 武蔵水路モニタリング委員会議事要旨

1. 議事内容：

- (1) 武蔵水路改築事業の概要
- (2) 平成 27 年度モニタリング調査結果及び今後の方針について
- (3) 平成 28 年度モニタリング調査計画（案）について

2. 審議（意見）結果：

- (1) 武蔵水路改築事業の概要
 - ・ 導水を堅守しながらの施工や J R 高架下等での工夫した施工計画・技術等、困難な施工をしながら事業を推進したことについては今後の参考となるため、事業評価監視委員会等でもアピールするとよい。
- (2) 平成 27 年度モニタリング調査結果及び今後の方針、(3) 平成 28 年度モニタリング調査計画（案）について
 - ・ 内水排除の効果として、今後整理する内水排除量、水位低減効果だけでなく、過去の内水排除実績を評価することも大切と考える。
 - ・ 武蔵水路周辺河川の内水排除効果については、周辺河川の水位低減だけでなく、周辺河川の流量をどのくらい低減させたのかについても評価するとよい。
 - ・ 氾濫解析については、改築による内水排除の迅速化を浸水面積や浸水深等で評価することに加えて、実際に被害が発生した箇所について内水排除によってどの程度浸水深を下げたという評価や、内水排除を実施していなかったらどれだけ浸水面積が増えたという評価も併せて検討していくとよい。
 - ・ 河川環境に関する調査のうち、生物については主に河川水辺の国勢調査をもとに評価をすることになるが、その場合、調査地点の問題や年度によって調査が入らないこともある。このようなモニタリングの検討結果を受けて、河川水辺の国勢調査の調査内容に反映できる仕組みがあるとよい。
 - ・ 荒川の河床低下は、荒川で環境を見ている人にとっては関心が高い問題である。因果関係が不明とのことであるが、国土交通省荒川上流河川事務所、水資源機構等で取り組んでいる調査等があれば情報提供してほしい。
 - ・ 武蔵水路は荒川の流水の確保に一役買っている。荒川の流水の 3 分の 2 が利根川の水から成り立っていることから、武蔵水路から流れてくる水の荒川への環境に対する意味合いを検討する場があってもよいと考える。
 - ・ 準備会において、評価にあたってのシナリオを明確にすることを意見として述べた。今回の評価にあたり、環境の項目を影響要因で分けて整理するようにしたことにより、

非常にわかりやすくなったことは評価できる。

- ・ 内水排除については、地元に対する説明を意識すべき。これまで約 80 回の内水排除を実施しているが、特に近年は増加傾向にある。都市化の進展や気候変動により豪雨が増える中で、武蔵水路が防災に貢献してきたという現況を地元で説明するとよい。
- ・ 説明資料で、新河岸川の自流として示した部分については、清瀬下水処理場の処理水が柳瀬川を通じて入ってきており、それを含めると現在の新河岸川は下水処理水がかなりの割合を占めることになる。今後、浄化用水の効果の検討においては、武蔵水路の水が新河岸川の流水に占める下水処理水の割合低下に貢献している点も考慮してほしい。
- ・ 隅田川(新河岸川)では天然アユが支川の柳瀬川や黒目川に遡上し、稚鮎が放流されていないにも関わらず天然鮎が生息している。また、親水利用も新河岸川水系の諸河川では盛んである。隅田川(新河岸川)の貴重な生態系や親水利用にも武蔵水路の浄化用水が有効に機能していると説明することが出来ると考える。
- ・ 取水による利根川の水質への影響について、検討に用いている流量データが出水も含めた年総量での評価としているが、水質調査は平水時に実施していると考えられるため、出水時を除いた形でも評価した方がよい。
- ・ 工事による底生動物への影響確認では、工事前では御成橋の調査結果を使用し、工事後は武蔵水路合流点直下での調査結果を比較している。利根川・荒川での取水・注水による底生動物への影響は、今回、既存調査結果を整理した結論で大丈夫と考えられるが、工事による局所的かつ短期的な影響については、御成橋地点で比較出来るのか確認が必要である。そのため、次年度のモニタリング調査のうち底生動物については、荒川合流地点と同時に御成橋地点でも調査を実施したらどうかと考える。
- ・ 武蔵水路は内水排除の役割を果たし、管理用道路も主要なインフラとして地域に貢献しているが、地元ではなかなか理解されていない。武蔵水路が地域に貢献しているという点を地元へ積極的に説明した方がよい。例えば、地元の小学校では、公共事業学習の教材において、利根大堰(武蔵水路)の利水の役割が説明されているので、内水排除の役割も説明に加えるなどの取り組みが出来るとよい。

以 上